

障害に学び、明日に向かって生きる



千葉県

高梨憲司

私は四十七歳。二児の平凡な父親です。ただ一般の人にはない視覚障害という個性を持っています。人生の最大の目標は、平凡な一市民として当たり前前に生きること。しかし、この「当たり前前に生きる」ということがいかに難しいことか！生涯の課題でもあります。

一 教師への夢

生まれつきの弱視であった私は、六歳にして盲学校へ入学するため、懐かしい両親の家を後にする

こととなりました。初めて郷里を離れることは、耐え難い悲しみでもありました。夜空を見上げて、星の輝きに家族の顔を思い浮かべる日々が続いたのでした。そんな私に寄宿舎の先輩達は優しく^{いたわ}り、寮母さんは添い寝までしてくれました。

それでも、時間と共に新しい生活にも慣れてくると妙なことに気付いたのでした。先輩達が一人残らずマッサージ師として巣立って行くではありませんか。子どもだったら誰にでもいろんな夢があるのに！何の疑問も持たないように見えるその姿が、私には不思議でなりませんでした。自分も我知らずそうなって行くのかと思うと、居ても立ってもいられず、ある日、母に向かって「僕は按摩^{あんま}さんにならなくちゃいけないのかなー！もっと違うことをやってみたいよ！」と、胸の内を打ち明けたのです。すると母は、「おまえが別のことをやってみたいなら、それもいいだろう。ただ、目の不自由な者が目の見える者と肩を並べて生きるとはとても大変なことだよ！それでも自分の選んだ道を進みたいなら、これだけは覚えておきなさい」と、話してくれたのが次の格言でした。

「なせば成る。なさねば成らぬ何ごとも、成らぬは人のなさぬなりけり。一度思い立ったらけっして振り返ってはならない」と。

この言葉は、それからの私にとって生涯の戒め^{いまし}となったのです。幼い頃から家の近くに住んでいた在日朝鮮の家族が、発音がおかしいという理由でからかわれるのを見て育った私は、この時、他人の不幸を嘲笑うことのない社会にするために、教師になろうと決意したのでした。

中学部を卒業すると、盲学校の教員養成課程へ進学することを夢見て、千葉から東京の盲学校へ転校したのですが、田舎出の私にとって東京での生活は驚くことばかりでした。特に、クラスの交流会を通じての一般の高校生との交際は、いつしか「将来、健常者の社会で自分の力を試してみたい！」という強い願望へと私をかり立てていきました。当時はまだ盲学生を受け入れる大学等ほとんどなかった時代です。私は担任の先生のアドバイスでテレビを通じて大学進学を訴えることにしました。そのためには父に進学の承認を得なければなりません。秋のある日のこと、思い切って父に「お父さん！僕も大学に行きたいんだけど！」と申し出ました。すると父の言葉は「身分不相応なことを考えるな！目の見えん者が大学等へ行ける訳があるまい！だめだ！」の一言でした。「よし！見ている！絶対に合格してみせる！」と、心に誓った私は四当五落の思いで勉強に励んだのでした。

テレビ番組はたったの十五分程のものでしたが、降りしきる雪の中を母と共に出演しました。寄宿舎に戻った私の元に、実家の近所の人から電話が入りました。それは「けんちゃん！テレビを見たよ！えらかったね！お父さんも目に涙を浮かべて見ていたよ」というものでした。私はその瞬間、「勝った！」と思うと同時に、私に落胆させまいとした父の本当の心を知って、溢れる涙が止まりませんでした。

それから間もなく、ある大学から待ちに待った「受験OK！」の知らせが届いたことはいうまでもありません。

二 二つの教訓

順調に大学まで進学した私でしたが、この頃既に、僅かに残っていた視力も失い、全くの全盲になっていました。もちろん大学には点字の教科書もなく、板書も聞き書きするしか勉強の方法のない私にとって、わかっていたこととはいえ、途方にくれる日々でした。そんな時、支援してくれたのが福祉学科に学ぶ学生達でした。彼等は、英文学科に学ぶ私のために学習の手伝いばかりか、初めて健常者の社会に飛び込んだ私に、健常者の物の考え方や付き合い方まで教えてくれました。

けれども、世話になればなるほど、私は自分の存在意義がわからなくなっていきました。自分にかせられたレポートであるのに、友人が辞書を引いて代筆までしてくれる！これでは誰のレポートなのか！生産することなく、消費のみの障害者の生きる意味はどこにあるのか？このことが頭から離れることのない疑問となっていたのです。自分の存在に疑問を持ちつつ、否定することも出来ずに眠れぬ日々となりました。

こうした自問自答に一石を投じたのが、それまで親しく交際していた女子学生の父親が娘に言った次の一言でした。「障害者だって結婚はしたいだろう。それに理解を示す女性がいるのはよいことだ。けれども、おまえがそのために犠牲になることはない！」。

私の「教師になりたい！」という夢は、この時、「生涯懸けて自分の存在意義を見付けたい！そのために、より障害の重い人達と生活を共にしよう！」という決意に変わっていったのです。

大学卒業と同時に就職したところは盲重複障害児の施設でした。障害があるが故に家族から離れ、三歳から十九歳までの百人もの子ども達が生活指導を受けるために入所していました。大部分の子ども達は目も見えず、話すことも出来ず、一人では歩くことも用便を足すことも出来ない子ども達でした。この子達はいったい…！

失恋によって絶望し、自分の存在意義を捜し求めて施設の指導員となった私でしたが、この凄まじいまでの光景に我を忘れ、懸命に介護に当たりました。就職時に施設長から言い渡された言葉は、「障害者が健常者の社会で銅として通用するためには金になれ！」でした。口惜しいけれども事実です。見えない分を何かで補わねばなりません。女性職員と対等に仕事をこなすために時間と労力を惜しまず、人の好まぬ仕事や忘れていることを進んですることにしました。繕い物をするために畳に針を立てて懸命に糸を通す練習もしました。子供の健康状態を確認するために便に触れ、匂いも嗅ぎました。

ようやく仕事には慣れたものの、相変わらず解けずにいる存在意義の疑問に解決の糸口を与えてくれたのが、一人の障害児でした。或る日のこと、私の元に、一本の電話が入ったのです。視覚障害が進行しつつある女性からの「将来が不安で、いっそ死んでしまいたい！」という悲痛な訴えでした。早速面談して、園内を案内しました。すると、廊下の真ん中で一人の少年が保母のスカートの裾を引っ張って大暴れしているのに出会ったのです。すかさず女性が、「先生！あの子はどうして騒いでいたのですか？」と、詰問してきました。そこで、私は次のように答えました。

「おそらく彼は何かを訴えていたのだと思います。それを私達が十分理解してあげられないのがいかんとも残念です。人間にとって耐えがたい苦しみから逃れる最後の手段が自らの命を絶つことだと言われます。しかし、彼はその術も知りませんし、おそらく己の人生を恨むこともないでしょう！生きんがために残されたあらゆる手段を用いて訴え続ける。彼の毎日は生きようとするこの全てなのです」と。

女性はただ一言「ごめんなさい！」と、涙を浮かべて帰っていきました。

それからしばらくしてからのことです。風の便りに、私は彼女が施設に入所して訓練を始めたことを知ったのです。彼女を死から救ったのは誰なのか！私はただ少年の生き様を説明しただけです。疑う余地ありません。何の価値もないかと思われていたあの少年だったのです。

私はこのことを知った瞬間、体中を電撃が走ったように感じました。「この世に価値のない人間はいない。他人の価値に気付かない人が多過ぎるのだ！人の価値とは、生きているそのこと、即ち、尊厳的価値こそが真の人の価値ではないか！その人に価値がないのではなく、人の価値を見抜く感性を持たない自分自身にむしろ問題があるのだ！」と。何年も解けずにいた問題が一遍に解決したような、何ともいえない爽やかな気分でした。

施設で遭遇した貴重な出来事のもう一つは、妻との出会いでした。私と同じ職場に指導員として就職してきた彼女は、何か不思議な、新鮮な感じで近付いてきました。大学の社会福祉学科を卒業した

ばかりの彼女にとって、障害者と接するのは初めてであつたらうに、何の異和感も配慮も持ってはいませんでした。仕事中はもちろん、プライベートな時間でさえ、あたかも私が自分と同じ成育歴を持ち、他の友人と同じように話題を共有しているかのように話し掛けてくるのです。こうした感じは、今までになかったことでした。たいていの人達が視覚障害である私を配慮して、話題を選んだり、プライベートな付き合いでさえ遠慮している様子でしたのに！

結婚後、施設を退職して教員となった彼女は、私の職場近くのアパートから電車を乗り継いで通勤していましたが、私が彼女の職場近くの公務員住宅へ引っ越しの提案をした時のことです。彼女は「お父さんの職場に近い方がいいんじゃない？私のことは心配いらないから！」と聞き入れてくれません。私は、初めて彼女が私の障害を気遣ってくれたものと思い、内心嬉しく感じていました。

それ以来、長男、続いて長女と、十二年間に及ぶ保育所の送り迎えは私の役割となりました。気付いた時には既におそし。先に帰宅する者が育児をし、家事をするのは当然のことです。してやられたかもしれない。けれども、これが正に平等というものです。私は妻の策略？を知って、この上なく嬉しく思いました。

こうして妻は、「社会には障害者や健常者という区別はない。異なる個性を持った同じ社会の構成員なのだ」ということを、身を持って教えてくれたのでした。

三 障害者と共に生きる

現在、私は中途視覚障害者に生活訓練を行なう更生施設で、施設長として運営・管理に当たる傍ら、社会福祉士としても在宅障害者からの様々な相談を受けています。

近年、成人病、特に糖尿病による中途視覚障害者が急増する中で、人生の半ばにして視力を失い、路頭にさ迷う人達からの悲痛な相談が次々と寄せられています。失明と同時に生活の術さえも失ってしまう人、長い闘病生活の結果、家族から見離されて一人寂しく施設に入所してくる人、どこに相談したらよいかかわからず、家族皆で悶々とした日々を送っている人、数え切れない程の不幸があります。それでも家族のある人は家族に励まされ、家族のために社会復帰を果たそうと懸命に障害と戦う姿があります。しかし、家族もなく、住んでいたアパートからも追われて施設に入所してくる人の中には生きる希望さえ持てなくなっている人も少なくありません。

彼等と実情は異なるものの、かつての私も生きることの価値を見失いかけて最重度の重複障害児に救われました。そうした思いがあるからこそ、彼等にも「人生は終わったのではない！むしろ新たな人生はこれからなのだ！」ということをおわかって欲しい。

「ああー生きていてよかった！」と思える日が必ずくることを信じて欲しいと願わずにはいられません。

たとえ生涯を施設で過ごすことになったとしても、自分の意志でその人なりの生き方を選択し、自

己実現を果たせるような生活でなければなりません。他人の介助を受けつつも、自分の意志で生きるからこそ意味があるのです。自己決定にハンディを有する知的障害者であっても、その判断を補佐し、当たり前の生活が保障される施設でなければなりません。私の施設は生活訓練を目的とした有期限の施設ですが、昨日まで普通の市民としての生活をしてきた人が、障害を負った上に集団生活故の二重の拘束を受けることがあってはならないと考えています。そのために、援助プログラムは利用者自身の選択とすることはもちろん、居室の模様替えや喫煙・晩酌も自由としています。これには様々な意見や問題もありますが、ひょっとして自分が施設の利用者であつたらと考えると、当然なことではないでしょうか？

また、中途障害のために生活訓練が必要になつたとしても、出来るだけ在宅のまま家族ぐるみの自立援助を受けられることが望まれます。指導員が家庭に訪問して訓練を行い、必要に応じて入所訓練を利用し、また、家庭に戻っていく。私は、こうした支援システム作りのために数年間奔走してきました。その努力が実ってか、平成七年度に自治体によって制度化されるに至りました。今後とも必要な援助を作り出す努力を続けていかねばならないと考えています。

たとえ障害を負っても地域で一市民として当たり前の生活を続けられるようにするためには、リハビリテーションのシステムが整っただけでは十分とはいえません。地域にそうした障害者の願いを理解し、支援してくれる人々を育てていかなければなりません。身近な地域に気軽に声を掛け、手を差

し延べてくれる人がいたなら、たとえ経済的には苦しくとも、障害者やその家族が一人で悩む必要はなくなるでしょう。そうした環境作りに私なりに貢献したいとの思いから、昭和五十九年よりボランティアとして青少年の福祉教育とボランティアの育成に取り組んでいます。特に、次代を担う子ども達に勇気と希望、思いやりのある心豊かな人として成長して欲しいと願うからです。市内の小・中学校を巡回して、授業の中で障害者の喜びや悲しみ・生きざまを語っています。ねらいは障害者の境遇に同情を求めるではありません。子どもなりに同じ人間であることを肌で感じ、生きることの大切さを知って、自身の成長に役立てて欲しいのです。

四 新たな夢

ある時、私の元に、在宅障害者の訪問訓練を担当している指導員から一人の女性が紹介されてきました。一人娘が大学受験の最中に失明してしまったというこの母親は、本人以上に落胆して、世間を^{はばか}懼り、娘を入院先から自宅に引き取ることも出来ないでいました。私はこの母親に、子を思う私自身の両親の姿や自分の経験を話し、懸命に生きようとしている多くの障害者の姿を紹介しました。その結果、家族皆が娘の将来に希望を抱くようになり、娘もその期待に応えようと職業訓練に向かったのです。

こうした体験の積み重ねによって私自身、何時しかピアカウンセリング（自立した障害者が自身の

経験を生かして障害を負った人々を導くこと)こそ自分に課せられた任務ではないかと考えるようになってきました。そして更に、福祉講話を聞いた子ども達から寄せられる「僕も小父さんに負けない勇氣と夢を持ちたい!」「『勇氣を出して声を掛けてごらん!』という小父さんの話に励まされて、押してあげた車椅子の小母さんの笑顔が忘れられずに、ボランティアを始めました」等という素直な便りは、障害も一つの私の個性であることを教えてくれたのです。

幸いに私は視覚障害という個性を持ちつつ、健常者の中で働き、普通の市民として地域社会で生活しています。たとえ障害があろうとも、当然になすべきことをし、障害故に困難なことは共に代わる方法を考えていく。こうした自然なありのままの付き合いこそ大切なのではないでしょうか?このよるな私の立場が、障害を持つ人とそうでない人との架け橋となり、心のバリアを取り除いて、誰もが望む社会の創造のために貢献出来るなら、この上ない喜びです。

私にとって今、ボランティアの育成と青少年の福祉教育は残された人生を掛けたいと思う夢の一つになりつつあります。友人からの私のボランティア活動の成果を問われたことがあります。福祉の種はそう簡単に実を結ぶというものではありません。けれども、何時の日か必ず一つや二つは花開くはず。そうした貴重な花があちこちで実を結ぶならば、何十年か先には誰もが住み慣れた地域で愛する者と生涯を全う出来る時代が必ず来るはず。その日を信じて、一つでも多くの福祉の種を蒔き、専門職のピアカウンセラーとして迷える人々に明日のあることを教えたいと思うのです。

そして、果たしえない夢かもしれませんが、「いのちの電話」の相談員になること、福祉講話に寄せられる手紙を次の子ども達のために出版すること、希望はまだまだ膨らんでいきます。

人間の一生はドラマのようなものではないでしょうか。悲しみもあれば喜びもある。成功もあれば失敗もあるでしょう。結果ではなく、与えられた一度の人生をいかに自分らしく描くか！それが最も大切なことなのではないでしょうか。

私の半生は両親の励ましと妻の理解、職場の友の協力を支えられて、障害に学ぶ毎日でした。そして、このことはこれからも生涯続くことでしょう。社会的に評価される人生である必要はありません。よき夫であり、よき父でありたいのです。そして、自分ならではのと思える仕事を精一杯したい。決して奢らず、これでよかったと思える人生を歩みたいのです。障害者としてではなく、普通の一市民として平凡に当たり前の人生を生きること、それが私らしい生き方なのです。

高梨憲司

昭和二十四年生まれ 視覚障害者更正施設愛
光施設長
千葉県千葉市稲
毛区

選評

“夢をもち続ければ成就する” “困難を克服するたびに人は大きく育つ” と言うが、高梨さんの人生はこの通りでした。「平凡な一市民として当たり前前に生きる」ことはとても難しいが高梨さんは立派に生きてみせて下さった。心からの敬意を払いたい。社会に障害者、健常者という区別はない。異なる個性をもった同じ社会の構成員であるという自覚。ピアカウンセリング、福祉教育、ボランティア育成のふくらむ夢の成就に期待します。

(江草安彦)